

学会ニュース

日本女性学会

第12号 1982年11月

モントリオール国際女性会議に参加して

この報告書は、去る9月25日に京都で行なわれた研究報告会のものです。

(1)

正味8日間の会議は全体会が6、分科会約70、その他の催しが毎日といった忙しきであった。

全体会のタイトルは「Ⅰ. 女性に関する研究」「Ⅱ. 女性に関する授業」「Ⅲ. 資源とネットワーク」「Ⅳ. 研究と社会活動」「女がみる」「Ⅴ. 総括と将来への展望」であった。それぞれの全体会に続く分科会で、個別のテーマが全体会との関連で話しあわれる、という仕組みである。

ⅠAの分科会を列挙すると、「女性に関する研究とは何か」「研究方法」「研究手段」「論争になりそうな問題の扱い方」「未来にいかにかに備えるか」「情報の獲得と伝達」である。ⅠBでは「成人教育」「文化人類学」「開発」「経済学」「社会学」「女性学」等々の分野ごとに分れた。Ⅱの分科会では、「教授法」「体制的組織内での戦略」「組織外での戦略」「社会の変革」「国際間、地域間の協同教育計画」について話しあわれた。Ⅱで私の参加した分科会では、どのようにして大学教育に女性学を導入したかについてカナダ、アイルランド、韓国、米国の事例紹介があった。充実していて幸運な(?)例もあるが、共通点は女子大共学を問わず女性学という科目を望む(潜在的にでも)女子学生と必要性を切実に感じる女性教職員の存在である。Ⅲの全体会はどちらかと言えば外部からのスピーカーによる確立されたネットワークの紹介といった趣であった。これを受ける地域分科会は「アフリカ」「ラテンアメリカ」「アジア」「カナダ」「カリブ海」「ヨーロッパ」「中東」「米国」に分かれ、地域内での情報資源の共有と情報網作りについて話しあった。ⅣAの分科会は「活動のための研究とは」「公共政策への反映」「他の女性たちへの影響」「活動志向の研究が活動をひきおこすか」「活動の道具としての情報とその普及」「国及び国際機関は役立つか」であった。ⅣBの分科会は「ボーボワールのフェミニズム」「アフロアメリカンの女性教育」「国際的マネジメントに於ける女性」及び「地域間分科会」であった。「女がみる」は他の全体会とはやや異なった角度からフェミニズムをみようというものであり、スライド等を用いて芸術に於ける女の問題などを扱った。この後に直接これのみを受ける分科会はなかった。

上記以外に毎日様々な企画があった。レセプション、美術展、各種展示と関連するワークショップ、詩と音楽の夕べ、映画、パネルディスカッション、週末のツアー等である。

こういったプログラムにあるものだけではなく、番外の寮や食堂等での新しい友人たちとの出会いも草の根ネットワークの始まりではないかと思う。1982年の日本にいて、いわゆる第三世界を視野の中にいれたインターナショナルを考えることのむづかしさを感じる。知識は想像力の枠を抜けることもあるので、こういった会議にまた参加したいと思う。

(田口 英子)

(2)

コンコルディア大学の寮で泊っていた私達にとっては、国際会議より合宿といった方が相応しいと思いますが、私の場合には会議が正式に始まる前から「番外」の話に夢中だった。

夜11時半に寮の受付の部屋に着いたら他に7、8人の女性が登録の手続きをしていました。その中のインドの田舎町で大学の学長をしているサリー姿の女性が話をし始めたのがきっかけで、皆で食事に出かけて2時まで話合った。その中で印象に残ったのは、一人のアフリカ人の話だった。彼女は会期中にアフリカの田舎に帰って、村の女達に最近掘った井戸の使い方を教えなければならないのだ。その晩話し合ったことから私は、会議全体と私自身に一つの問いかけをし始めた。アフリカに帰って井戸を掘る仕事をしている人にとっての「女性学」と、私達にとっての「女性学」はどのような関係をもっているかという問いかけであった。

会議が始まると、概念や道具、教育、社会行動、将来の四つのテーマに分かれて議論が進められたが、先の問いかけに対する答がその中から部分的にでてきたと思う。敢えてごく荒っぽい結論をいうと、貧困に苦しんでいる女性達も、いわゆる第一世界の女性達も、次の二つのことを主張している。一つは「まず女性に聞く」ということである。経済発展の場合でも、大学のカリキュラムの問題でも、従来無視されてきた女性の意見を最初から聞くと新しいパースペクティブから問題をみることができること。第二は、女性の視点から見直すことにより生まれてきた情報をどのように社会行動に変えていくかということである。この点について具体的な例を出すと、インド、カナダいずれの発表でも家庭内暴力に触れたが、両者の社会的背景は全く違うけれども同様に女性の側から問題を定義し、その視点から行動を目指す。経済発展の場合も同様である。

インターナショナルなフェミニズムとは何かという問題については、1979年にバンコクで開かれた国連主催の“Feminist Ideologies and Structures in the First Half of the Decade for Women”でマス・メディアによる歪められたフェミニズムのイメージを定義し直す中で検討された。その時に次の二点がまとめられた。

- (1)女性に対する抑圧からの自由は単に平等の問題だけではなく、女性が自身の人生を選択する自由とコントロールする力をもつ権利でもある。すべての女性の尊厳と自律の意識を確かなものとするには女性が家庭の内外のいずれでも人生と身体を自分でコントロールすることが根本的である。
- (2)フェミニズムの第二の目標は、各国毎に国際的に、もっと公正な社会的・経済的秩序を創りだしてあらゆる形の不平等と抑圧を除去することである。国の解放闘争、国の開発計画、地域毎や世界的規模といったさまざまな変革のための闘争に女性を加えることを、これは意味する。

番外に出てきた話だが「インターナショナル・フェミニズム」という言葉自体に問題があるのではな

いかということである。英語の“international”は国家間の交流を意味するが、フェミニズムが世界的に広がっていくとすれば、それは国家を超えたレベルのものだから“Global Feminism”という言葉の方が相応しいのではないかと。84年のアジア地域部会と85年の国連の会議に出られたら、この「地球的」な運動がどのように発展していくかを見たいと思う。(レベッカ・ジェニスン)

(3)

コンコルディア大学シモーヌ・ド・ボーヴォワール研究所が主催したこの会議には、80ヶ国以上から350人以上の女性が集まり(若干の男性もいた)、10日間に亘って研究・教育・活動、それぞれの問題点と今後の見通しについて見解を述べたり検討すると同時に、それらの相関性についても検討していくことが課題であった。

会議を主催したシモーヌ・ド・ボーヴォワール研究所は、女性の歴史と現代社会での女性の地位を理解することを目的として1978年に設立されて、人文・科学部の全学生が登録し単位を取得できる女性学のプログラムを提供している(Major 39単位、Minor 27単位、Certificate 30単位)。他学部の学生も準会員として登録し受講できるようになっている。このプログラムの常勤講師陣は、同大学各学部からの寄りあいで16名いるが、その $\frac{3}{4}$ が女性、残りの $\frac{1}{4}$ が男性である。同研究所は、このようなプログラムを提供する他に、ワークショップ、セミナー、討論会の開催、外部女性組織と共同の研究プロジェクトの構成、全国女性学会の主催というようなコーディネーターの役目を果たしている。今回の会議開催は1980年コペンハーゲンでのNGOの女性学部会の意向を引き継いだものだった。同研究所は会議開催を一カ月後に控えた時期に、漏電からか研究所が全焼するという憂き目に会いながら無事開催にこぎつけ会期終了まで事を運んだのであり、そのたくましさや責任感の強さに私は目を見張る思いがした。

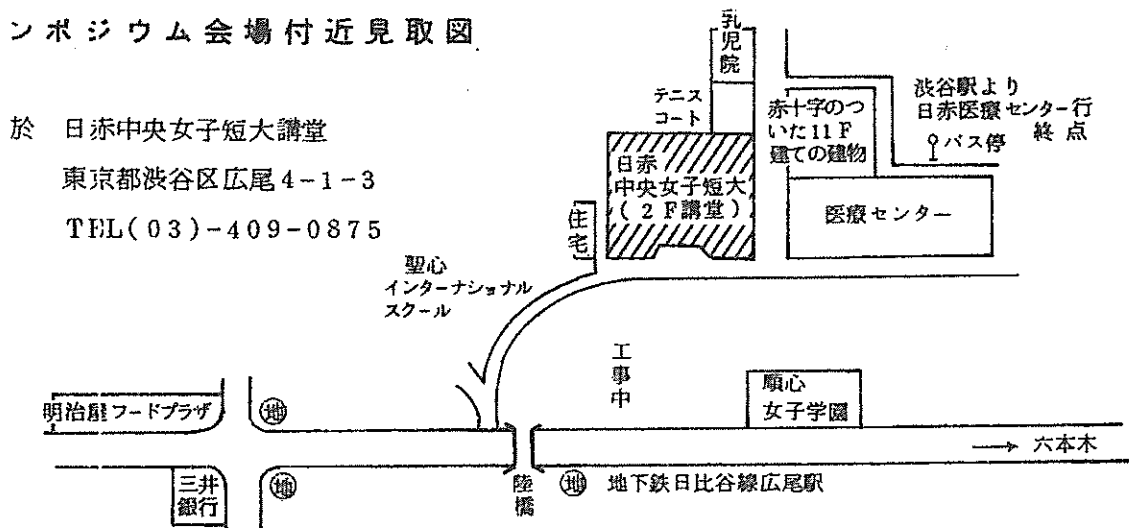
会の進め方は、全体会議を研究・教育・活動の領域ごとに半日開き、それぞれの領域の現状や課題につき基調報告をし討論するというものだった。各領域の全体会議を受けてワークショップが半日あるいは一日開かれたが、研究の領域の場合には、既成の研究領域に分かれて、たとえば人類学、社会学、心理学、それに開発など10余のワークショップが開かれた。私は社会学関係に参加したが、そこでは各国での目下の研究課題を相互に紹介している内に“household”の概念をめぐる共通の認識のないことを発見し、討論はそこに集中していった。

活動の領域に関しては、地域部会が開催されて、それぞれの地域でどのようにすれば効果的なコミュニケーションが可能かを探っていた。アジア地域部会にはスリランカ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、インド、イラク、台湾、韓国、タイ、日本からの参加者が集まり、各国の研究と活動について情報を交換することから始めようと「アウラン(Asian Women's Research and Action Network)」を結成してニュースレターを年4回フィリピンから発行することになった。各国内で関心のある人に参加を呼びかけるということと同時に合意し、1984年の地域部会開催を決定したのであった。

もっとも印象に残った報告に、研究と実践の関連性を扱ったブラジルとインドの2報告があった。ど

ちらも直接研究者がグループ活動に参加し観察したり、活動を指導したものであるが、前者は研究者が特定の意図（日常生活レベルで性の問題を考える）をもって既成の母親学級に参加し、メンバーの意識変革を実現していった過程をスライドを用いながら報告し、後者は、逆にレイプ事件をめぐる最高裁判決に憤慨した女性たちのフォーラムから、人々の日常生活や意識から除外されていた家庭内暴力（インドの場合には、夫が妻に加える暴力）の厳然たる実態が浮かび上り、それへの取り組みが問題解決のための模索と調査研究が相補う形で展開されていった、その記録であった。（矢木 公子）

11月27日(土)午後1時～4時
シンポジウム会場付近見取図

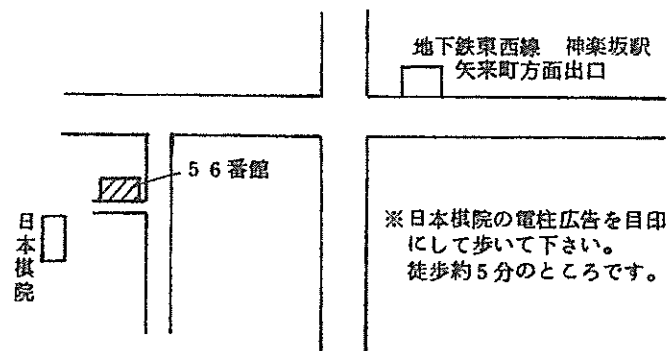


※ 当日は土曜の午後でもあり、事務の人手もないので、できるだけ会場（短大）への電話連絡は御遠慮願いたいとのことです。

優生保護法に関する研究会へのおさそい

女性にとって深い関心事である優生保護法について、このたび有志でプロジェクト・チームを作りたいと、研究会を開くことにいたしました。関心がおありの方はどなたでもお気軽におでかけ下さい。

とき：11月28日(日)午前10時半より
ところ：東京都新宿区矢来町56 56番館
TEL：03-267-1723



国立婦人教育会館における

女性学講座とシンポジウムに参加して

松原純子

8月27日より29日の3日間に涉って、埼玉県の緑と水に囲まれた国立婦人教育会館にて昭和57年度の女性学講座が開かれた。会館に宿泊しながら研修に参加した人200名余、近隣都県からの日帰り参加者約110名で、計300人以上が一堂に会した。日本女性学会々員の藤枝、井上、青木、矢木、松原等の演者はじめ、白井、田沼、宮田、福井、富士谷、志村の諸氏の顔もみえた。

講座の内容は、1日目が秋山さと子氏による「子供の性別役割形成」についての講演、2日目が青木やよい氏の「性別役割の比較文化」について、井上輝子氏の「マスコミと性別役割」および藤枝零子氏の「アメリカにおける女性学の成立をめぐって」と題する講演がなされた。全般的に、女性学講座と銘打ちながら、日本の女性の手で作出す学問がみえてこないで、アメリカの女性の活躍に感嘆せざるを得ないのが日本の女性学の現状かと残念に思った。夜には、互いに膝を交えた分科会が自主的に開かれ、「初めて私のところに国際婦人年の風が吹いてきた」という遠方からの参加者の声も聞かれ、私は情報図書室で畑違いの社会学の文献を探索したり、入それぞれの意義があったと思う。

さて、3日目には「女性学の課題」をテーマとしたシンポジウムが開かれた。国際女性学会の小玉美恵子氏、女性学研究会の中嶋邦氏、日本女性学研究会の矢木公子氏、本学会から松原がパネラーとなり、各学会の現況を紹介したうえで、各自が自分と女性学とのかかわり、各会の女性学に対する観点等を話した。上記4つの組織の活動状況については、本ニュース第10号の漆田氏の記事に詳しいので省略させて頂く。女性学の考え方として、国際女性学会は、「女性の視点を学問にとり入れ、人類全体を正しく把えなおそうとする学問」、女性学研究会は「女性の視点を研究に持ち込み、より豊かな学的成果を挙げることを課題とする」、日本女性学会は御承知のように「人間としての女性尊重の立場から学際的に女性およびその関連の諸問題を研究し、女性の視点を持って既成の諸学問を洗い直すもの」と謳っており、いずれも同じような考え方を持っていることがわかる。日本女性学研究会は、活動の活発さ、共同会議制にもとづく水平型組織等にユニークさが伺われた。機会ができれば一本化して4者が協力し合う方が、より大きな力になるのではなかろうかと発言したところ、会場から賛同する声が上がリ、何故一本化できないのかという質問が出された。その理由は、今迄は女性が自分の持場を守るだけで手一杯で、他を知る情報に欠けていたこと、「女性学」に対する共通のイメージ、志を同じくする人間としての「女性学者」に対する魅力が形成されていないこと、組織を作り互に協力しあうことのメリットを女性が認識していないことなどが原因ではなかろうかと私には思われる。

最後に、私なりに「女性学の基点」を整理し発言した点を報告しておく。女性学の基本的観点とは、第一に性差別に対抗する視点、第二に日常の生命生産活動を重視する視点、第三に現代の機械的物質生産や分業主義に対抗し、他者と共存し分担する視点の三者に要約されるかと思う。これらを主軸とした女の視座を、学問的にも実践的にも押し進めていくことが、現代に生きる女性の積極的任務ではなかろうか。また、私にとっての女性学とは、「人間はどこまで意識変革ができるか」という問いの中に含まれており、限りある人生の中でいかに検索できるか、その道は険しいと日頃実感する次第である。

＜ 新 入 会 員 ＞

- 葛 村 的 子 中央大学法学部3年
東南アジアの文化
- 服 部 範 子 大阪成蹊女子短大非常勤講師
家族社会学社会福祉
- 高 島 奈 緒 サンケイリビング新聞社
- 草 野 美 智 子 熊本県立氷川高等学校国語科教諭
藤原定家の和歌 — 恋歌にみる定家
の技法上の特質

1982.9月～10月 <寄贈図書・資料>

- ・「去華」創刊号 就実女子大学女性学研究会
- ・VOICE OF WOMEN 1631 日本女性学研究会
- ・昭和57年度女性学講座資料 国立婦人教育会館
- ・女性史研究グループのリスト 志村緑
- ・「近代日本看護史における看護婦の社会的地位・評価に関する研究」連載第27回, 第28回
看護 Vol. 34 168, 9 亀山美知子
- ・婦人展望 '82 9月号 婦人会館出版部
- ・JAUM 127号 大学婦人協会
- ・婦人情報センターだより 1610 東京都婦人情報センター
- ・VOICE OF WOMEN 1632 日本女性学研究会
- ・婦人展望 '82 10月号 婦人会館
- ・「婦人教育情報」166 国立婦人教育会館
- ・「地域一大家族」第16号 「地域一大家族」編集委員会 (岩崎美穂)
- ・「Seminar on Women's Studies Programmes in Latin America and the Caribbean (FINAL REPORT)」 Division of Human Rights and Peace, UNESCO
(渥美育子氏より寄贈)
- ・在ニュージーランドの Chigusa Kimura-Steven さんより Women's studies: Conference Papers WOMEN'S STUDIES ASSOCIATION (N.Z) '81 の紹介パンフレットとニュージーランドの女性学会の活動状況についてのお手紙

連 絡 事 項

アメリカの渥美育子さんより、アメリカの女性学関係の資料を今後適宜お送り下さるとのご連絡を頂きました。今回は第一便としてポストングループ紙に掲載された記事

“Feminism in two cultures. A Japanese rebel moves on — to America”
“Japanese feminist in America”
のコピーをお送り下さいました。また11月12日には Japan Institute Harvard University にて

“From Lib to Feminism” — Japan's Women's Movement after 1970”と題する講演をなさるそうです。私達を大いに勇気づけてくれる、渥美さんの御活躍です。尚、この記事を含め、コピーの御入用な資料がありましたら60円切手同封の上事務局までご連絡下さい。コピーをお送り致します。

- ・ Zed Press (London) より
本のシリーズ“Third World Women's Series”の紹介、広告
詳細は事務局までお問い合わせ下さい。
- ・ 国立婦人教育会館より「開館5周年記念事業」のお知らせ
テーマ 婦人教育の充実をめざして「学習と実践の輪を」
婦人教育国際事業(セミナー、交流会)
ニュース・レター-11号にてお知らせ済み
記念展示「5年のあゆみ展」11月10日～30日
展示ホール 一般参加者・会館利用者は随時見学可
映画会 11月12日・13日・16日・17日・18日
各日2時間ずつ 計13本のフィルム上映
随時応募 参加者公募(往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・宿泊希望の有無を記入の上、会館事業課へ申しこむ)
論文発表会 11月17日 13:30～16:00 講堂にて
女性フェスティバル 11月19日(10:00～17:00)
20日(9:00～16:30)
(学習・活動発表 実技発表 展示)
グループ参加は利用申込書にて、個人参加は往復はがきに住所・氏名・参加希望日を記入の上事業課へ

編 集 後 記

政治経済界では“関西復権”などという言葉がよく聞かれますが、さては日本女性学会の内部にも??と思われるのでは……今回もまた、前回に引き続いて京都からニュースレターをお送りすることになりました。古都は今紅葉まっ盛り、皆様ぜひお遊びにいらっしゃって下さい。(亀山)

発行 日本女性学会
〒103 東京都中央区八重洲1-4-21
共同ビル13F 西洋美術研究会内
電話 03-274-1791